TOKO NO.152 2009.1.1どの子も地域の学校へ！公立高校へ！東部地区懇談会
連絡先・春日部市大場690－3　Tel 048(737)1489　Fax 048(736)7192
メール：waraji@muf.biglobe.ne.jp　ホームページ：http://members.at.infoseek.co.jp/TOKOnews/

12月23日・春日部市旧谷中小体育館で開催されたわらじの会「みんな一緒のクリスマス」

TOKO新春企画　「友だち１００人できるかな」すべての子らとともに
講演　・あゆみ幼稚園園長・鈴木一義さん
（会場とのトークや卒園生の一言メッセージも企画中です）
２月７日（土）午後（予定）詳細は決まり次第お知らせします。

☺ C O N T E N T S ☺

揺れながら　一緒に　TOKOとの出会い 2
共に学び育つための就学相談会 4
わかりますか？高校入学をめぐる争点 6
高校行って　どうするの？　どうしたの？ 7
教育を改めないと ……　福祉のひどさも変えようがない 9
速報 *「就学支援」と言い換えても　従来どおりの「適正就学」強要*
誰でも参加できるイベント情報 10

TOKO が初めてお手元に届いた方へ
TOKO を初めて目にした方へ
　子ども達を分け隔てなく育てるために
　どの子も一緒に地域の学校へ通えるように
　地域へ、行政へ、働きかけている会です
　ぜひ、一度のぞきに来て下さい　待っています

ＴＯＫＯとの出会い

揺れながら　　一緒に

新井　茜（さいたま市）

気付き

下の娘の成長について疑問を持ち始めたのは２歳を過ぎたころ。

意味のある言葉がなかなか増えない。食べ物はとにかく全てが『パン』で、動物は『ワンワン』だった。

もともと気性が穏やかで、とりたてて大騒ぎすることもなく口数も少ない子だったので「これも個性のうち？」と思いたい反面、「もしかしたら何かあるのかな」と思い始めていた。加えて、母子手帳の成長をチェックする項目で『いいえ』に該当する個所が増えてきたこともあり、何とも言えない不安な気持ちになった。

この子の上に２つ違いの姉がいるが、何においても成長や習得が早く、２歳のころには一人前に会話ができるようになっていた。自分の意見も言えるし、どんなことにでも積極的に取り組める、明朗活発を地でいくような子だった。同じ親から生まれた子なのに、ここまで違うものだろうかと思うほどだ。下の子と接していても、上の子の育て方は参考にならず、「二人目だから」などという言葉は慰めにさえならず、子ども一人一人が違っていることを痛感させられる毎日だ。

「何かおかしい？」と気付き始めたが、どこに行って誰に何を相談すればいいのかさえ分からなかった。とりあえず市の育児相談に出向いたが「まだ年齢が低すぎるから様子をみましょう」と言われ、半年くらい様子をみていたが、あまり変化が無かった。

２歳 10 ヶ月の時、ようやく小児神経科の紹介状が出て受診したところ、その場で精神発達遅滞の疑いといわれ、後に正式に診断がおりた。ある程度覚悟をしていたことと、診断名がつくことで今後の対応策が見えてくるのでは、という見通しがつきそうな安心感から、その告知を素直に受け入れることができた。

診断名がついたものの、障害全般について全く何も知らなかったので、まずは情報収集から始めた。と同時に、娘の居場所作りを、と考え、近くの幼稚園に率直に話をしてみた。すると「集団生活をすぐに始めるのがいいだろう」とのことで、快く迎え入れてくれることになった。それ以来、幼稚園での生活は驚くほどスムーズで、嫌がることなく通い続けている。先生方、友だち、周囲のたくさんの人に囲まれながらの園生活は、文字通りのびのび過ごすことができ、自分に自信が持てる体験・経験を重ねることができている。また、在園中の３年間、同じ先生を副担任として配置していただき、園の手厚い配慮に心から感謝している。

地域で子育て～岩槻ゆとり子育てネットワークたまひな

岩槻に嫁いで早いもので 10 年になる。結婚したころは仕事をしていたこともあり、地域のことに

は無関心だった。やがて子どもが生まれ育てていくうちに、

「成長した子どもたちが、育った環境や住んでいるまちを受け入れ、自分のまちが好きだと思える人になって欲しい」

と感じるようになった。だが、私自身が岩槻のことを何も知らず、友だちも知り合いもいなかったため、まずは未就園児対象のサークルに入ることした。このサークルには姉妹で合わせて４年間在籍した。小さな子を連れて出歩くことは簡単なことではなかったが、家で子どもと向き合うより、出向いた先で周りの人の手を借りながら過ごすことの方が私の性に合っていた。

サークル活動を通して、たくさんの子ども、ママ、地域の方々と出会うことができた。これから先の子育てで行き詰まったり困ったりした時、「ちょっと話だけでも聞いて欲しいの」と気軽に声をかけられる人が近くにいる、そう思えるだけで、なんとなく気持ちが軽くなれた。子育てをしていくうえで大切なのは、自分だけでがんばるよりも、どれだけ周りを巻き込んでいけるかどうかだ、という考えに至った。

岩槻には『岩槻ゆとり子育てネットワークたまひな』※（以下たまひな）というネットワークがあり、子育て関連団体やサークルの情報交換や交流の場になっている。私が在籍していたサークルも『たまひな』の会員だった。サークルを退会した後も今までつないできた輪を持ち続けていたい、と思っていた欲張りな私は、今も『たまひな』の一員として活動を続けている。地域で活動することで知り合いを増やしておいたことが、後に判明する娘の障害のことを知ってもらったり相談できるきっかけとなり、その機会が格段に増えたことは、私にとって想像もできない、うれしい誤算となった。

※『岩槻ゆとり子育てネットワークたまひな』については「子育て新聞」（越谷 NPO センター発行。岩槻区内の子育て関連施設などで無料配布中）にて詳しく紹介している。

TOKO との出会い

サークルや園生活を通して娘の成長を実感する反面、就学という乗り越え難い壁が迫ってきている。生活するぶんにはあまり不都合を感じないが、学習面になると話は別。年長の２学期も終わろうとしているのに、数字や文字の認識がまだまだ不十分なのだ。ようやく興味が出てきたが、習得するまでに時間がかかるタイプなので、無理に教え込んでも仕方ない、と積極的に働きかけていないことも要因のひとつかもしれない。今の発達状況からすると、特別支援学級でゆっくり取り組める環境の方が娘の自信にもつながるだろう、と考えていた。ただ、自分だけの偏った思いだけで決められるほど簡単な問題ではなく、たくさんの人の意見や考えを参考にしたい、と思っていた。

新聞で TOKO の就学相談会があることを知ったのは、ちょうどそのころで、「どの子も地域の学校へ」という考え方が衝撃的だった。学校の間だけ特別支援という制度に守られていたとしても、いずれは社会に出ていかなければならないこと。いつまでも親が付き添ってはいられないこと。子自身の本当の自立とはどういうことか。

あの相談日以来、普通級という選択肢があることに遅まきながら気付き、かなり揺れ始めてしまった。たくさんの体験や経験をする日々の積み重ねが「自分」を形作っていくとしたら、それができる場所はどこなのか。あまり欲張りすぎると娘自身がつぶれたり崩れたりしないか。どこに就学しても悩みが尽きないのであれば、周りと同じ普通級に入れるのが当然じゃないか。現実には支援が必要な娘の現状や課題を見ないふりをして、親の希望を押し通そうとしていないか。そもそも、どうして普通級と特別支援学級があるのか…。悩みは尽きず、答えはまだ出そうもない。

入学がゴールではないことは分かっているが、その先に待つ生活は想像すらできない。どの場を選んでも娘と一緒に成長して行きたい、と今はただ覚悟を決めるだけである。

共に学び・育つための就学相談会（於 越谷市北部市民会館）

ＴＯＫＯとして初めて、幼稚園や保育所、通園施設等にチラシを配布させていただき、マスコミ、ミニコミにも記事を載せていただいて、就学相談会を開きました。予想をこえる沢山の方が見えられました。以下は、プロフィール。

Ａさん：春日部市在住。子供３歳。保育園。生後5ヶ月で病気をして、知的な遅れが残った。複数の療育施設にも行っている。就学は2年先。ことばは単語程度。友達と過ごすことで、できることが増している。

Ｂさん：春日部市在住　子供年中。染色体異常。重度の知的障害　普通幼稚園　単語しか話さないが、幼稚園に通ってから、すごく友達に興味を持ち、手をつないだり、遊びたがる。住んでいる地区には特殊学級がなく、普通学級だけなので迷っている。

Ｃさん：上尾市在住　来年小学校。いま年長。男の子。２歳上に姉。
上の子に手がかかったのにくらべ、この子はとても育てやすいと思っていて、障害に気づかなかった。２ 歳のとき小児科で言葉が遅いと言われた。乳幼児保健センターの親子教室で、1年間言語指導を受けた。言語は出るが、他の子と関わらないので、心の相談も。いま岩槻の小児医療センター。広汎性発達障害、選択性緘黙（慣れているところではよく話すが、そうでないところではまったくしゃべらない）。すごいショックを受けた。相談すればするほどこんがらがって。出てくる人により、対応がちがう。迷っている。お姉ちゃん本人は、同じ小学校に入学してくるのが楽しみ。まだ姉には弟の障害のことを話していない。どう話していいかもわからず。間もなく就学時健診がある。
　子供がいいというところを選ぶのか？親が決めるのか？特殊学級に行くと、手取り足取りやってくれるので、そちらのほうがいいというかも。
Ｄさん：　岩槻在住　年中　手帳　Ｃ　3歳のときに、精神発達遅滞、軽度。就学相談に行くと特学ですねといわれる。今は普通学級を望んでいるが、周りの子ができることが、自分がやるとできないとうまくいかないで、苦しんでいる。特殊学級の見学に行ったが、あまり説明してくれなかったので、不安。どこに行っても、先生との出会いになってしまうのか。授業のときに、みんなと同じ課題をやっているのか？別の課題をやっているのか？同じ時間をどう過ごさせているのか。
Ｅさん：川口市在住。就学相談を受け、親の希望で普通学級を望み、6年間やってきた。中学進学に向けて、地元の中学校は特学なし。ちょっと離れた特学のある中学校に行こうかと就学相談を受けた。決定はまだ。自立に向かって、きちんと教育を受けて生活していくのには、どうしたらいいのか。自信をもってやれるようにしたい。不登校になってはいけないと思っている。

Ｆさん：吉川市在住　娘５歳、息子３歳。二人とも障害があり、歩けない。上は1歳10ヶ月で障害がわかり、ショックだった。

不明。大きくくれば、脳性まひではないかとのこと。彼女なりに成長して得ていくものをと考えている。3歳前に通園施設に入り、いま3年目。就学前に保育所へ行かせたいと考えている。下の子は、1歳から保育所に入り、健常児の中でのびのびと育っている。知的な遅れはない。

ぼくは障害児受け入れの草分けであるあゆみ幼稚園の卒園生。親ががんばって普通学級に行き、小・中卒業後、通信制高校に行った。普通学級に行った結果がいいのか悪いのか、定かではない。いい関係も悪い関係も含めて、いろんな関係をひきずっていることは確か。そんな中で、親に反抗して1人暮らしして、もう20年。みなさんの話を聞き、いまだに親ががんばらなくちゃ普通に生きられないのかと思った。(樋上　秀・誰もがくらしやすい街づくり実行委員会代表・越谷市)

Gさん:さいたま市在住　娘が5歳、年中。保育所。高機能自閉症。通園施設に週1回通園しているが、そこの保護者の会を代表して、就学についての話を聞いてきてくれと言われて今日来た。6，7月に教育相談がある。保護者の1人のお子さんの就学について、学区内と学区外に特殊学級が1クラスずつあるが、学区内は知的と情緒の混合で、情緒障害の子供は、混合だと余計にパニックになるので、第 1 希望は学区外の特殊学級にした。しかし、学区外への就学を、市は認めない。どう交渉していったらいいだろうかという相談。

Hさん:春日部市在住　5 歳。言葉が遅いのと、他の子に興味がないので、小児医療センターで検査、広汎性発達障害といわれる。知的障害があり、特学がいいのかと思っている。いろいろな人の話を聞いて考えたい。

I　さん:12 歳の兄がいて 4 歳児、幼稚園。7月の終わりごろに自閉症と診断される。半年くらい前から市の言葉の教室に通っている。来年は就学のことを考え始めるので心配。市は、養護でも特殊でも普通でも、希望を100%かなえますと言う。そう言われて、逆に悩んでいる。どこが一番この子にあっているのか。本人にとって一番いいところ、のびのびして、自分の気持ちを生かして行けるというか、生活の中から楽しみを見つけられるようなところをと思う。

共に学び・育つための就学相談会 (2008.10.30　於・越谷市北部市民会館)

２ページにご紹介した新井さんは、この就学相談会にお見えになった方です。トップページの写真にある「わらじの会・みんな一緒のクリスマス」にも、お子さんと一緒に参加されました。「悩みは尽きず答えはまだ出そうにもない」と書かれています。

ＴＯＫＯの「どの子も地域の学校へ」というのは、「地域の学校」がいいところだからという意味ではありません。新井さんの言うとおり、「どこに就学しても悩みは尽きない」、でもそれは障害のない人たちも同じかも、だったら悩みも希望も一緒に伝え合い、ぶつけあって行こうよという意味です。この就学相談会の場も、正解を示す場ではありません。大人の障害者たちや先輩の親たちの体験、そして手探りで歩いている同輩の親子に出会うことで、迷いながら一歩を踏み出すきっかけが得られればいいなと考えて企画しました。

どの子も地域の公立高校へ
埼玉連絡会
(斉藤代表)

障害のある生徒を高校が受け止めるよう、教育局全体として受験先高校に働きかけてください。
受け入れていくための課題を高校と共に検討し、解決するようにしてください。

わかりますか？高校入学をめぐる争点

県教育委員会では、障害のある生徒の入学者選抜における学力検査及び選抜に当っては、障害のあることにより不利益な取り扱いをすることがないように留意することを基本的な考え方としています。

学校長及び特別支援学校長に対しては出願に当っての留意事項を、そして双方については、学力検査の際特に配慮を必要とする措置などを協議する際、十分に協議することとしています。

そして、こちらのことについては校長会議等で直接、話をして理解を深めるように努めています。　今後とも、該当する学校に対しては、これまでと同様に可能な限り働きかけてまいります。

埼玉県教育局高校教育指導課
(細田主席)

共に生きる埼玉は共に学ぶ公立高校づくりから

上のやりとりは、どの子も地域の公立高校へ埼玉連絡会（斉藤尚子代表）が、11月19日に行った交渉の要望書と、それに対する県教育局の回答。連絡会は、単純明快に要望を投げかけた。それに対して、教育局の回答はなんとも歯切れが悪い。TOKOの読者のみなさんは、この回答の意味がおわかりだろうか？

入試方式自体が不利益だ

「障害のあることにより不利益な取り扱いをすることがないように」というけれど、知的障害や言語を含む全身性の障害などの場合、テストを行う側が本人独自の意思表現を理解しないままで、問題を作り、判断するのだから、そうした入試方式そのものが「不利益」なのだ。連絡会は局と交渉を始めた20年前から、このことを指摘してきた。歴代主席は、交渉の中で、ウーンとうなりながら、これを認めてきた。だが、すぐに方式を変えられない。だが、「不利益」はなんとかせねば。そのためには、原則、受け入れるしかない。だが入試がある。そこで、交渉発足後間もなくから県が約束してきたのが、定員内不合格解消に努め、定員割れの高校では原則全員入れるようにすること。局は「強い指導」をしてきたというが、最終的には「合否は校長の裁量」として、定員内不合格は出され続けている。

近隣都県では積極的に入試を変えている

入試方式による不利益は、とうぜん定員割れの高校だけではない。これに対し、本県では「学力検査の際特に配慮を必要とする措置」が認められているが、点字受験とか別室受験、代筆など、主に身体障害への配慮にとどまっている。対して、東京、神奈川、千葉では、記述式回答をすべて選択式に変えたり、障害をもちつつ学ぼうとすること自体を積極的に評価したり、移動の困難に配慮して近所の高校に入りやすくする等の積極的な入試方式の改善を行い、定員オーバーの高校でも知的障害の生徒や重い障害の生徒を受け止めてゆけるようにしてきた。なぜ埼玉はこんなに立ち遅れてしまったのだろうか。

受け止めた高校・教員への支援が必要だ

高校の教員たちは、障害のある生徒たちとのつきあいがほとんどない。それは、「高校は義務教育ではなく、その学校の教育を受けるに足る能力・適性のある者だけが来るところ」という「適格者主義」といわれる考え方で、入試をはじめ、単位取得や卒業認定で、できない子を切り捨ててきたことと無関係ではない。また、障害のある子は、義務教育段階でも、他の子供たちとは別の教育の場を強いられてきたため、中学卒業後はほとんどが養護学校高等部しか行けないものだと思い込まされているので、高校を受ける障害のある生徒自体がめったにいなかったからでもある。

だからこそ、高校・教員たちへは、十二分な支援を県として行う必要がある。東京、神奈川、千葉では、人的支援を行っているが、本県の教育局は言を左右にしている。都教委は、高校・教員向けに、「障害のある生徒の指導について」と題する資料を配布し、法令や指導要領、判例を引用して、生徒の指導上の配慮・評価・進級・卒業について、弾力的な運用を行うよう説いている。千葉では、障害のある生徒の高校生活で課題が生じた高校が、連絡会に助言を求めてくるという。受け止めた後の高校・教員への支援がなければ、なんとか入れようという気も起こらないのは当然だ。

共に生きる埼玉づくりへの関門

国連の障害者権利条約に署名した日本政府が、批准に向けて国内法を整備する時の焦点のひとつが分離教育の見直し。だが、高校は義務教育ではないので、県がその気になれば十分やれる。高校は社会への入り口。小・中学校は原則分離だが、県内で千百十一人もの生徒が障害があっても他の子と一緒に学んでいる。今はその一割しか高校に入っていない。だから他の生徒も教員もつきあいが薄い。職場・地域で出会ってもつきあい方がわからない。共に生きる埼玉は、共に学ぶ高校づくりから！

高校行って　どうするの？　どうしたの？

公立高校を共に学ぶ場にと、連絡会は門を叩き続けてきました。でもまだ狭い隙間がやっとあいた程度。それでも行くのですか？たった3年のことなのに。不合格にされて浪人するくらいなら、養護学校高等部に入って、その先の進路を考えたほうがいいんじゃないの？たしかにそうですね。でもその先の進路って、そんなに安定したレールがあるんでしょうか？障害者雇用のかなりは非正規雇用です。福祉の現場は障害者自立支援法の嵐にさらされています。その時々の社会をどう生きるかが問われます。そんなヒントになれば、高校卒業生の体験を載せます。養護学校に在籍しながらも学校に行けなかった過去を背負った北川さんと、いま大学生の網島さんです。いずれも（社）埼玉障害者自立生活協会の「通信」よりの転載です。

春日部高校定時制２０００年３月卒業生

北川（旧姓・木暮）　みずき（さいたま市）

もう12年前の事　私は学校行けずに中学・高校は在宅でワープロを一人でしてました。

その影響からネットークのどの子も普通高校への参加に興味をしめし、22才から深く考えました。23才の時に将来のために高校を受けました。

受かるはずがないと全介助の私には受かるとは思いませんでした。

足にえんぴつにて車椅子からおり、床に座り試験を受けました。

春日部高校に行き、番号があり、色々ありましたが　入学し新しい生活がはじまりました。

夕方の5時15分から登校し、私達の時代は古い校舎の1階に四年間、私のために2クラス合わせ62人でした。そのうち29名卒業しました。

男子トイレに身障者トイレがあり、担任や養護と。いつのまにか女子の生徒さんに、手伝ってもらいました。

最初は足に乗せるテーブルが用意してワープロをおき、中間、期末テスト受けました。はじめは私のことをジロジロと給食も担任や保健の先生が食べさし、ときどき食べそびれてました。

ある日、養護教師をめさした年は同じ年で介助教員が週3回つきました。介助員に反対してる人もいました。かなり心のかっとうもあり、だが、いない週3回は（当時隔週に土曜登校が義務でした）、介助員がいないとカバンから教科書などを取ってくれたり、当時は不良した子、中国人、16才から60才勉強したくて色々と駅にクラスの不良少年が見かけ階段手伝ってくれたり、心のうちは優しい子でした。

大人柄にそうみたり、学校辞めた生徒もいました。私も毎回「木暮何考えてる。色々とあるが、みずきは出来るねよ。やめちゃー意味ないけん」担任は広島生まれでした。「英語くらい出来と、つうしまであんきしな」と家まできて「みずきは何を考えてる。私にはごまかせないぞ。学校きんや。分かるな。みずき」心から人を思う担任でした。

部活は一年の時は何やるか分からず読書部でもつまらないもので寝てました。2・3・4年は書道部、やりがいも私にはありました。

運動会はパン喰きょうそうでした。いまだに寒い体育館、寒い中いらとしてました。今は8年たつのでいい思い出過ぎますね。

昼間は運動しながら今になると自分のために通い、20代前半から後半に人生勉強をさせて頂きました。記憶にそって書かさせて頂きました。　（SSTK「通信」NO. 138 より転載）

いつも、連絡ありがとうございます。
なかなか参加できませんが、「こんなことやってるんだな～」と思いながら読ませていただいています。
久しぶりに健作の近況をお伝えしようと思い、メールさせていただいています。
高校をこの3月に卒業しまして、4月から大學の文学部で日本史を学んでいます。中学生の時から、日本史を勉強したいという希望を持っていましたので、
「やっと、日本史が勉強できる！」といったところのようです。
自宅からだと片道2時間弱かかっていましたので（松伏からだと、新越谷までバスで30分かかるんです）、
今月から、一人暮らしを始めました。
障害があることで、部屋探しも難航することを覚悟していたのですが、そんなこともなく、すんなりと決まって、親としてはホッとしました。
親としては、経済的には大変ですが、本人の強い希望がありましたので、それを尊重して、思い切ることにしました。
本人は、まだほんの二週間ほどなのですが、親から離れて自由を満喫しているようです。
無事に4年間過ごして欲しいと願うばかりです。
大学のほうは、体育がどうなるのかな、とちょっと思っていましたが、「コントロールクラス」というのが設定されていて、講義中心のクラスを取ることができました。
身体障害だけでなく、健康上の理由とか、年配の方とか、結構な人数がいるそうです。
では、また、近況報告します。

綱島信子

TOKOをメールでお送りしている綱島信子さん（松伏町）から上記のようなお便りをいただいたので、さっそくご本人のアドレスをお聞きして、社団法人・埼玉障害者自立生活協会の機関誌「通信」への寄稿をお願いしました。障害者の進路というと、就職か福祉かと考えるのが常ですが、大学という道もあることを紹介してほしいと思いました。
ほどなく健作さんから送っていただいた原稿が以下です。「通信」から転載いたしました。

大学行って…一人暮らしして

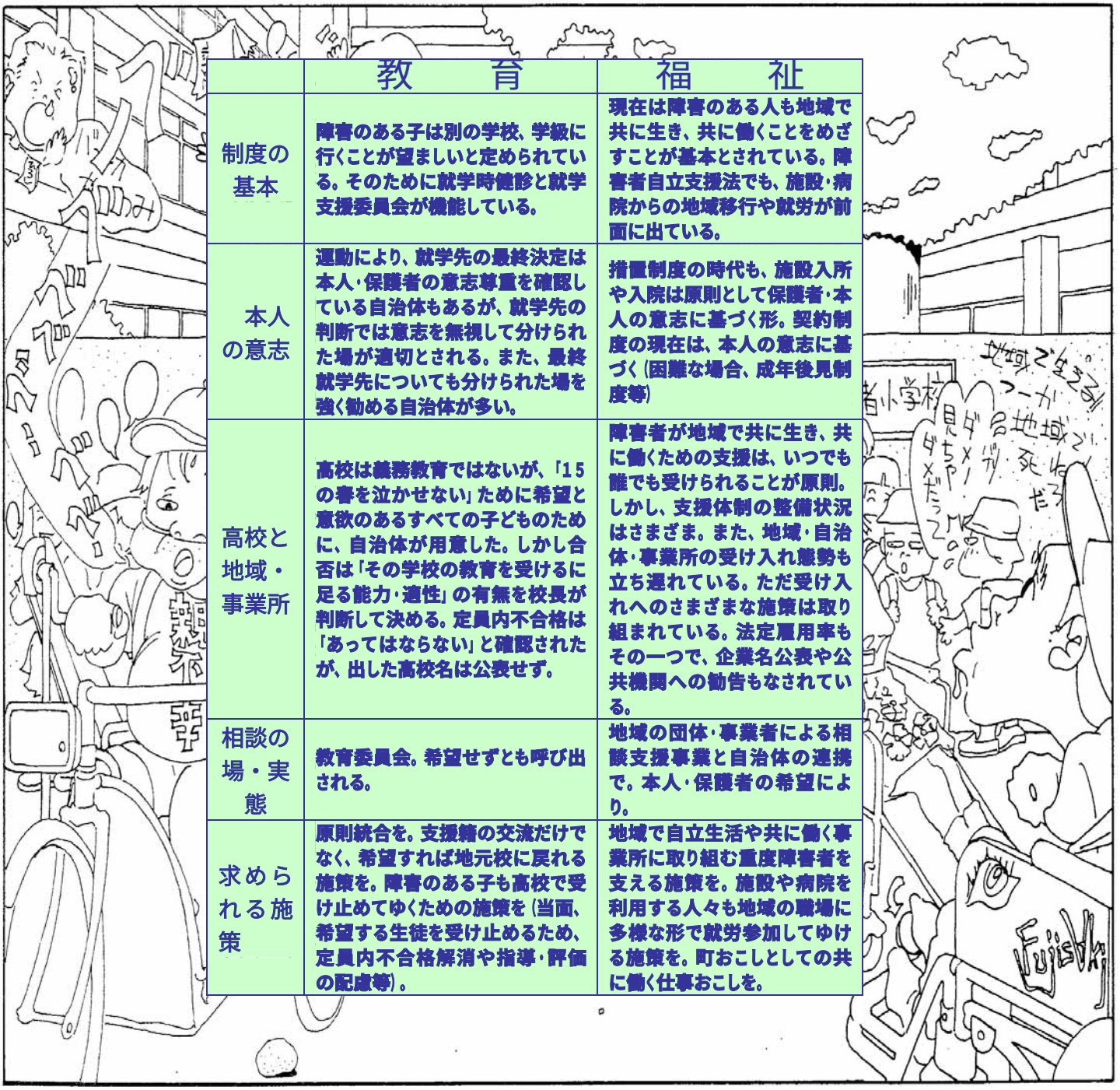
正直言って大学生活といっても何を書けばいいのかよく分かりませんが、思いつくままに書いてみます。

まず、大学には推薦等ではなく一般入試で入りました。入学する際、脳性まひの障害を問われることはありませんでした。健康診断の際に言っておきましたが・・・
実家から、大学まで約２時間かかりますが、通っていました。が、体もしんどいし、通学時間の無駄というのもあったし、家を出たいという思いも、もともとあったんで、６月から１人暮らしをはじめました。　親には経済的負担は増えるので、悪いとは思っていますが・・・・加えてアルバイトはしようとは思っていますが、なかなか自分でもできそうなものを探すのに苦戦しています。なので、まだしていません。
本題の大学生活についてですが・・・
所属は史学科　サークルは将棋部です。専攻は来年からなのですが・・・日本近代史にしようかと思っています。高校とはだいぶ違うので、友好関係はどうしても狭くなってしまいます。　しょうがないです。
大学の校舎は比較的新しくできたものなので、階段にも手すりは付いています。エレベーターもあります。ですので、特に不自由は感じません。
体育に関しては、体調がよくない人たちでやる授業があるので、できないなりに配慮されつつ参加しています。　今は、歴史の勉強をしていますが、卒業後は公務員（障害者採用の枠？）を目指すために、対策の勉強をしようかなと考えています。（本当は学芸員を目指していますが、採用枠が極端に狭いと聞いたためにそこらへんは流動的です。）

まだ一年なのでこんなものです・・・　何かの参考になればうれしいです。

綱島健作

教育制度を改めさせないと福祉制度のひどさも変えようがない



	教　　育	福　　祉
制度の基本	障害のある子は別の学校、学級に行くことが望ましいと定められている。そのために就学時健診と就学支援委員会が機能している。	現在は障害のある人も地域で共に生き、共に働くことをめざすことが基本とされている。障害者自立支援法でも、施設・病院からの地域移行や就労が前面に出ている。
本人の意志	運動により、就学先の最終決定は本人・保護者の意志尊重を確認している自治体もあるが、就学先の判断では意志を無視して分けられた場が適切とされる。また、最終就学先についても分けられた場を強く勧める自治体が多い。	措置制度の時代も、施設入所や入院は原則として保護者・本人の意志に基づく形。契約制度の現在は、本人の意志に基づく（困難な場合、成年後見制度等）
高校と地域・事業所	高校は義務教育ではないが、「15の春を泣かせない」ために希望と意欲のあるすべての子どものために、自治体が用意した。しかし合否は「その学校の教育を受けるに足る能力・適性」の有無を校長が判断して決める。定員内不合格は「あってはならない」と確認されたが、出した高校名は公表せず。	障害者が地域で共に生き、共に働くための支援は、いつでも誰でも受けられることが原則。しかし、支援体制の整備状況はさまざま。また、地域・自治体・事業所の受け入れ態勢も立ち遅れている。ただ受け入れへのさまざまな施策は取り組まれている。法定雇用率もその一つで、企業名公表や公共機関への勧告もなされている。
相談の場・実態	教育委員会。希望せずとも呼び出される。	地域の団体・事業者による相談支援事業と自治体の連携で。本人・保護者の希望により。
求められる施策	原則統合を。支援籍の交流だけでなく、希望すれば地元校に戻れる施策を。障害のある子も高校で受け止めてゆくための施策を（当面、希望する生徒を受け止めるため、定員内不合格解消や指導・評価の配慮等）。	地域で自立生活や共に働く事業所に取り組む重度障害者を支える施策を。施設や病院を利用する人々も地域の職場に多様な形で就労参加してゆける施策を。町おこしとしての共に働く仕事おこしを。

障害者自立支援法は、就労や地域移行、そして本人の自己決定を謳いながら、実際にはその目的に合わせた軽度障害者を新たに量産したり、移行できない障害者をよりいっそう囲い込む仕組みを、障害者や関係者自身に担わせようとするものです。しかし、ここ5年ほどの間に、福祉サービスを利用する障害者は急増し、関係団体の多くが施設運営やヘルパー派遣の事業者になり、自立支援法の土台を支えるようになっています。いまの分ける教育が続く限り、養護学校高等部を卒業して福祉サービスの利用者になる人は増える一方です。そればかりか、高等養護学校や県立高校内養護学校分校といった、「軽度」・「就労」を売り物にした場ができ、分けられてゆく人々の数は増える一方です。その結果、障害のない人々は、共に生活し、ぶつかったり、支えあったりする経験がないまま社会に出てゆきます。地域や職場がそんな実情では、どんなに自立生活や就労支援に努めても、焼け石に水です。大人の障害者のみなさんや関係者のみなさん！共に学び・育つことを支え、分ける教育を改めさせましょう。

速報

「就学支援」と言い換えても　従来どおりの「適正就学」強要

―――県東部地区某自治体の親たちからＴＯＫＯに訴え

「現在、市町村及び県教育委員会は障害のある児童生徒の就学指導を行うため、教育学、医学、心理学等の専門家による就学指導委員会を設置し、障害の種類や程度に応じた適切な教育支援のできる学校や学級への就学指導を行っている。

こうした学校や学級など就学先に比重を置いた就学指導に対しては、障害のある児童生徒を『適正就学という名のもとに地域から分離している』との批判もある。

今後は、こうした就学指導委員会による就学指導を、地域との関りや保護者との相談機能の充実を図りながら、専門的な観点から障害のある児童生徒のニーズを継続的に受け止め個別の教育支援を行う就学指導に改める必要がある。」(平成１５年度埼玉県特別支援教育振興協議会　検討結果報告)

県や市町村が就学指導委員会を「就学支援委員会」と改めたのは、上記の報告を受けた結果である。しかし、その「適正就学という名のもとに地域から分離している」という実態は、いまもそのままにまかり通っているのではないか。最近、ＴＯＫＯに、親たちから訴えがあった県東部地区某自治体はまさにその典型のようだ。

この自治体では、本人･保護者の意志を無視して、通常学級にいる障害のある子どもの観察や検査を行い、一方的に就学支援委員会の審議に載せたあげく、審議結果を伝えるから来いと文書を送りつけてくる。やむをえず出かけると、「審議結果」が記された文書を手渡し、その文書にある「保護者の方の判断」という欄に記入して来いと指示する…といったぐあい。どこが「支援」なのか？この自治体が特にひどいのか、それとも同様の実態はあちこちにあるのか？あらためて、「特別支援教育」とはなんなのかと問わざるを得ない。この件については、次号で詳報したい。

誰でもいつでも参加できるイベント情報

１月

日	曜	開始	イベント名	会場	連絡先など
7	水	10:00	就労支援センターガイダンス	越谷市産業支援センター(越谷駅東口10分)	**越谷市障害者就労支援センター** **０４８－９６７－２４２２**
9	金	13:30	社団・ネット合同事務局会議	所沢市中央公民館	**自立支援ホーム「とことこの家」** **Tel/Fax:042-939-9733**
10	土	11:00	地域交流もちつき大会	くらしセンター･べしみ(千間台西口 20 分)	**くらしセンター･べしみ** **０４８－９７５－８５１１**
15	木	19:00	世一緒 de キネマ	職場参加ビューロー･世一緒(越谷駅東口10分)	**障害者の職場参加をすすめる会** **０４８－９６４－１８１９**
18	日	13:30	こども・ゆめ・未来フェスティバル実行委員会	県民活動総合センター(ニューシャトル内宿駅･羽貫駅より無料バス)	**ＮＰＯ法人彩の子ネットワーク** **ＦＡＸ０４８－７７０－５２７０** **ＴＥＬ０４８－７７０－５２７２**
19	月	19:00	どの子も地域の公立高校へ・埼玉連絡会事務局会議	ぺんぎん広場(南浦和駅より 15 分)	**どの子も地域の公立高校へ･埼玉連絡会** **０４８－７３７－１４８９**
21	水	10:00	障害者の職場参加を語る会	職場参加ビューロー･世一緒(越谷駅東口10分)	**障害者の職場参加をすすめる会** **０４８－９６４－１８１９**
31	土		「苞」交流会		**越谷市障害者生活支援センター「苞」** **０４８－９７０－９３９３**

２月

日	曜	開始	イベント名	会場	連絡先など
4	水	10:00	就労支援センターガイダンス	越谷市産業支援センター(越谷駅東口10分)	**越谷市障害者就労支援センター** **０４８－９６７－２４２２**
7	土	13:30	「友だち 100 人できるかな」あゆみ幼稚園鈴木園長講演		**白倉 048-752-7351(TEL&FAX)** **中山　090-2202-5271** **山下　048-737-1489(FAX:048-736-7192)**
27	金	13:30	交通アクセスシンポ「人と人との交差点・バリアフリー運動のこれから」	与野本町コミュニティセンター	**交通アクセス埼玉実行委員会** **０９０－４９３８－８６８９**